



日本記者クラブ

著者と語る

『インパラの朝』



中村 安希 氏

2010年4月26日

47カ国、2年間の旅を斬新な手法で描き、第7回開高健ノンフィクション賞を受賞した。旅行中から日本語と英語のブログを発信。帰国後は、「単なる旅行記ではないもの、新聞やテレビでは伝えられていない人々のことをストレートに書いて、本にしたい」と、出版につながる“賞取り”を狙った。26歳、女性のひとり旅。中国、インドから中近東、そしてアフリカへ——新世代のバックパッカ一体験記が痛快だ。

©社団法人 日本記者クラブ

きょうはお招きいただきましてありがとうございます。今回、『インパラの朝』という本で、開高健ノンフィクション賞を受賞できまして、そのことについてお話をしたいと思います。

この本は、2006年から2008年までの2年間の世界旅行をもとにした本です。皆さんに聞かれるのが、どうしてそんな旅に出たのか、ということです。行っている先が、日本からみて西側。中国とかインドとか、中近東。それからアフリカにも行っているんですが、何でそんなところにわざわざ行ったのか。そんな質問が多いんです。なぜ旅に出たのかというのは、別に、ある日思い立って旅に出たわけではなくて、それなりに計画があってこの旅に出ました。

私は、大学は、アメリカのカリフォルニア大学で過ごしました。その当時、舞台芸術学部において、芸術を学んでいた。アメリカでは2001年に9.11のテロが起こっていて、そういういろいろな変化の起きた時代にアメリカで芸術を学んでいた。そのときというのは、世の中が分断されていくというか、「私たち」と「自分たちの敵」という形で、世界が分断されて、社会の中も大分混乱した時期でした。

「若者よ、とにかく世界を見ておいで」

そういう時代に、私のいた芸術学部の先生たちはどんなことをいっていたかというと、できるだけ広い視野を持って、世界の裏側の人たちがどんなことを考えているのかを見ておいでということでした。それからアメリカ国内も、いろんな宗教観、いろんな民族、いろんな人種の人人がまざり合っている社会だから、その中でだれが敵だとか、だれが味方だとか、だれが悪魔だとか、そういうことを簡単に決めつけていいのかどうか。もっと広い視野を持って、この世界にはいろんな人がいるということをちゃんと理解して、それを理解したうえで表現者になりなさい、芸術家になりなさい。これが私の通っていた大学の先生の教えでした。

先生たちは、学生に広い視野をつけさせるためにどうしようかと、いろいろ考えていたよう

なんです。私の恩師は、とにかく世界をみに行けといつもいっていました。若者よ、とにかく世界に行けと。世界に行って、いろんな人に会ってこい。いろんな伝統芸能もみてこい。いろんな芸術に触れてこい。人の暮らしをみてきなさい。そういうふうにいっていました。だけれど、アメリカの学生も、結構うちこもりで、海外のことあまり興味がなくて、旅をする人も、実はあまりいないんですね。

アメリカでは、パスポートを持っていない人がたくさんいるともいわれています。なので、まず先生は、パスポートを取ってたら特別に加点をしてやるから、とにかくパスポートを取ってこい、と。それで、海外に少しでも行ってこい。アメリカ以外の国をみてきなさい。自分たちの考えが果たして世界でどれだけ通用するのかを確かめてきなさい。そのようなことをいっていました。

だけれども、私はもうすでに日本からアメリカに来ている身分で、もちろんパスポートを持っていて、国外にいるんですね。だから、将来、どうすれば芸術家になれるのか、どんな表現者になればいいのかということを先生と何度も話し合ううちに、先生がこんなことをいってくれました。「いま君はアメリカにいる。だからアメリカの国内で起きていること、それからアメリカの芸術、文学などいろんなものをたくさん吸収しなさい。そのかわり君がどこから来たのか、君がどれだけの距離を移動して、いまアメリカまで来ているのかということも忘れてはいけない」。

学生時代はアメリカのことについて一生懸命勉強しなさい。けれども、自分のやってきた道、自分のアイデンティティー、日本人としてのアイデンティティーを忘れずに、そして日本、アメリカ以外にもたくさんの国が存在しているということを忘れずにいなさい。いつか、君にももっと広い世界を見てほしい、と先生がおっしゃっていましたので、最終的な目標として、表現者になるというものはずっと変わらずにありました。大学を卒業して、お金も少しまって、時間ができたらぜひ世界を見てくる、旅をするということは決めていました。

アメリカとは反対側の西へ

3年間ぐらい社会人生活がありまして、その間に大変貧乏もしたんですけども、お金が180万ほどたまりまして、さあそろそろ旅に出るときかなと。どうしても旅に出てみたいところというのは、そのころ私の視点からみえていた日本、アメリカとは全く反対側にある中東とか、アフリカとか、自分の知らなかつたところを、逆にみておきたい、というのがありました。そういう気持ちになりました、行き先を西と決めました。

それで旅が始まるわけですけれども、最初の目的は、世界のいろんな芸術をみるとことでした。もちろん私は舞台芸術の勉強をしておりましたので、いろんな民族ダンスとか、伝統芸能とか、そういうものもみたいなあ、歌もたくさん聞いてみたいし、踊りもみたい。そういう気持ちでビデオカメラを持って、それからいろんなリポートもしたいなと思っていたので、パソコンも持って、結構たくさん機材を担いで出かけることになりました。それで旅が始まりました。

最終的にブログという形で世界の情報を発信することになるんですけれども、もともとはこんなことだったんです。

2年ぐらい日本で社会人生活をしているときに、「アジアパシフィック医療改革フォーラム」という医療関係の社会人のグループがありまして、そこでちょっとした活動をしておりました。そのグループが、「せっかく世界へ行つていいろいろみてくるんだったら、あなたの好きな伝統芸能を見てくるのももちろんいいけれども、僕たちにもぜひ何かリポートしてくれないか」ということになったんです。世界のインフラの状況であるとか衛生面、それから国際支援がどのようにになっているのかなどをリポートしてほしいと。さらに、自分たちの遠隔医療という分野でのイノベーションとして、自分たちの技術がどれぐらい世界に普及するかを計りたいという意味でリポーティングしてほしいという要請がありまして、まあ、軽い気持ちで始めたんです。最初はメールで関係者に一斉

配信をしてリポートしていたんですが、一般の方にも読んでいただいたほうがいいんじゃないいかということになり、医療改革チームがブログを立ち上げてくれました。それで一般の人にも読んでいただく形で2年間が始まりました。

旅をするにしたがって、いろんな国から来ているバックパッカーにもたくさん会いました。するとそういう人たちが、何で君は、日本語でブログを書いているんだ。そんなの書かれても私たちは読めない。ぜひ英語でも書くようにということをいわれて、ちょうど半年ぐらいたったときですかね。インドを旅していたときに、コルカタの安宿に長い間滞在しまして、必死で英語のブログを立ち上げました。それからは、英語と日本語で週に4本ぐらいブログをアップするということになりました。

これが非常に大変な作業でした。場所によつてはなかなか電気の確保ができないところもありますし…。それに、ただの日記というブログではなくて、もうちょっと踏み込んでリポートという形でやっておりましたので、一回一回がものすごく長くて、これを片づけるのが至難のわざでした。電気がなければほかの町まで移動していく電気を探す。できるだけ長く充電をしておいて集中する。とにかくバッテリーが切れる前に集中して書き上げる。そういうことをしながら旅を続けていきました。

行き当たりばったりぶらぶらと庶民の中に

では今度は何を書くか、ということが問題になつてきました。私もリポートをしている以上、いろんなことを取りあげて、みんなに紹介しなければいけないという立場になってきて、何を書くか、どういうふうにネタを集めてくるかということが問題になってきたのですね。それは一概にはいえなくて難しい問題なんですが、私がみつけた一番いい方法というのが、積極的にぶらぶらするということでした。

私は、お給料をもらっているジャーナリストでもありませんし、記者でもありません。だから、どこにも所属をしていない身分をうまく生

かしながら、そういうどこかにも属していない人間しかとれないような情報をとりに行かない意味がないのではないか。そういうことで、できるだけ庶民の生活の中にバックパックを担いで入っていくんですね。

でも、ただ入っていって、いろんなおもしろい話が聞けるかというと、実はそうではない。例えばある町に行ったら市場とかレストラン、カフェですね——大体は汚い小屋なんですけれども——そういうところに行って、毎日毎日同じものを注文して、そこにいる周りの人と友達になってしまふんですね。そういう形で、3日、4日過ごしていると、だんだんお互「あなた毎日来るわね」ということで、何となく知り合いになってくる。「じゃ、うちに来て、ちょっとご飯でも食べていいたらどう」だとか、「ぜひうちの妻を紹介してみたい」とか、「お母さんにどうしても会っていってほしい」とか、そういうこともいわれるようになりました。そういう話が来たときには、無理だといわず、それが水も電気もない山奥の小屋だったとしても、できるだけそこはついていく。そういう気持ちでついていって、そこでいろんなお話を聞いてリポートしていく。そういう2年間を過ごしていました。

最後に残ったのは出会った人々のこと

バックパッカーという立場でリポートを書くのは、記者さんが海外に行って持ってくる情報とは違うんじゃないかなと思っています。私の場合は、その現地に行ってみるまで、絶対に何が起こるかわからない。だれに出会うかもわからない。すごく貧困といわれる地域に行って、意外と実は全然貧困じゃないものに出会ったりもするんですね。危ない危ないといわれている地域に行っても、全然危なくない状況に出会ったりとか。そういうことが起きるんです。でも、例えば自分が政治部とかに属していて、紛争の取材をしなければならないと最初から決まっていたら、多分、その情報をとりに行かなければいけない。けれども、私の場合は、バ

ックパッカーですので、行った先に貧困がなければならないし、紛争がなければないし、どれだけ平和といわれているところでも、そこで、自分の目の前で犯罪が起こつてしまったら、それを書かざるを得ないです。そういう形で積極的な行き当たりばったりみたいなことをしながら2年間回りました。

出かける前は、この旅行をした後に本を書こうとは、実は思ってはいませんでした。私は、あくまでも舞台芸術の分野で何か生かせるものを探そうと思って、ビデオカメラを担いで出かけていったので、もともとは本を書くつもりもなかったのです。でも、周りの人には「せっかく2年間も行くんだったら、最後は出版でもしたら?」といわれていたんですね。でも、いやあ別にいまどき、バックパッカーやる人はゴマンといらし、本書く人だってゴマンといらし、本が売れない時代にそんなことやっても意味がないのでといって、「私は絶対書きません」と宣言していったんです。でも、旅をしていく中で、最初は舞台芸術という自分の一番興味のあるものというのが、だんだん変わってくるんですね。

そして、自分にとって興味のあるものが、最終的には人だったんですね。もちろん、おもしろがって世界遺産もみに行ったりもしましたし、ガイドブックでいわれているようなちょっとエキセントリックなところにも行ってみるとかもしました。伝統芸能ももちろんみに行ったりもしました。けれども、じゃ、何が一番最後に残ったかというと、あの町のあのカフェで出会ったお兄ちゃんとか、あそこの市場にいたおばちゃんとの会話とか、そういうちょっとした人とのつき合いだったんですね。ほとんど、まあそういうものですね。そういうものだけが残っていく。そういうものに自分は一番興味を持っていたんだなということがわかってくるわけです。そう考えると、私のブログも、遠隔医療フォーラムにあてて書いているものなので、ちょっと無理があるんですね。もともと医療関係の出身でもありませんので、その分野でリポートを書き続けるといわれても、それも非常に苦しい。

それで、一番自分がおもしろかったものが人だったのに、それをちゃんとした形で残さずに終わっちゃってもいいのかな、と思うようになりました。何かそういう気持ちになってきました。最後1カ月ぐらい、ヨーロッパを旅行してポルトガルでフィニッシュしているんですけども、そのヨーロッパに入ったぐらいのときに、出会った人々のことを書こうと思いました。

カウンターホームシックに陥る

その出会った人々の言葉とか、存在というのが、私が日本にいたときに報道されていた人たちのあり方とは随分違っていたというのもありました。そういう意味で、私がみた世界をストレートに書きたい。それから、テレビや新聞ではなかなか伝えられていないような人たちの存在を、せっかくフリーのバックパッカー・ジャーナリズムをやっているんだから、それはどうしても書きたい。そういう気持ちになってきました、それで本で表現しようかなという気持ちで帰国をしました。

帰国した後、一番問題だったのは、お金がなかったことですね。180万円使い果たして帰ってきて、銀行の口座をみたら、3000いくらとかになっていて…もうほんとにびっくりしまして、すぐに仕事を探しました。運よく、銀行で少し事務のお手伝いができる仕事がみつかりまして、安い給料ですけれども、働かせていただいた。とにかく銀行口座を3,000円からどうにかしなきゃいけないというのでやり始めたんです。けれども、そんなことをしていても、自分の2年間の経験が追いかけてくるんですね。私としては、まさか自分がホームシックに——ホームシックといいますか、カウンターホームシックですね——長い間海外にいて、日本に帰ってきたときに味わう、何ともいえない不思議な感覚のことですが、そういうことで精神的にダウンするということはもちろん聞いていたんですが、私が?という感じでした。私にとってはアメリカに6年ぐらいいて、帰ってきたときに、別にそれほどショックも受けなかつた

し、今回も2年間旅をして、日本に帰ったら普通にパッと社会復帰して、パッと仕事も探して、それで舞台芸術なり、執筆なり、そういう活動をバンバンやれる。今までの2年間の生活を踏み台にしてやるんだ、それぐらいの気持ちで帰ってきたんですね。それなのに、銀行で働いていると、何かどんどん自分がダウントしていくんですね。それはもう自分でも止めることができないもので、経験が追いかけてくるんです。それで3カ月ぐらいしたときにはすっぱり仕事をやめまして、とにかく、どうなってもいいから本を書きあげる、という覚悟になりました。

私としては、出会った人々のことを、なかなか報道されないような人たちの存在を、どうしても書き切らないといけないという思いで始めたんです。けれども、じや書き終わったところで、その書いたものはどうなるのか。出版できるのか。どうするんだ、ということになりました。出版はなかなか難しいことなんですね。でもノンフィクション賞に応募して賞を取れば出版できる、と思いました、単純に。

でも、ノンフィクションの賞というのは、実はあまりないんですね。公募ガイドというのを本屋さんに買いに行きました、それをバカッと開いてみていたら、2つありました。1つが開高健ノンフィクション賞。集英社のやっているものです。もう一つが、小学館ノンフィクション賞。締め切りが2月末と4月だったと思うんですけども、その2つぐらいしかなかったんです。どうしようかなと思いまして、結局、開高健賞に応募することになって、必死になって書きました。

それで応募して、運よく賞がとれまして、出版することもできて、もうほんとに思いどおりの方向に行ったな、と思っているんですけども…。

主観を排して答えを出さない書き方

書くということで、自分自身が気をつけていることといいますか、そういうのがあります。今回この『インパラの朝』を書くに当たっても、

いわゆる旅行記にしてはいけないという気持ちがありました。バックパッカーはとにかくたくさんいらっしゃいますので、旅行記はたくさん出ています。ですので、そういう形で書いてもなかなか読んではもらえないだろうと思いました。せっかくいいなと思って拾ってきた世界の声がうまく伝わらなかつたら意味がないわけで、そのあたりを書く方法ということに、気を使って取り組みました。

あとはもう読んだ人の感想次第になるので、私がこういうふうに書いたからこういうふうに読まれただろうとか、そういうのはわからない。けれども、一つの方法として、できるだけ主觀を排するというか、できるだけ答えを出さない本にしたいなと思いました。だから、これを読んで何か意味がわからなかつたという人がいたとしたら、多分、それはすごく真っ当な意見なのではないかなと思うぐらいです。

私はできれば書物の中に答えを出したくなくて、読んでいただく方が私と一緒に旅をして、私がみた光景と一緒にみていただいて、その一瞬の状況と一緒に体験していただいて、それでどう思うか。それは、読んだ方それぞれの個人の自由だと思っています。いつも書くときには、できるだけ客観的にそのシチュエーションを眺めて描写する、そういうことをやっていきたいなと思っています。

肌で吸収し消化した言葉で

今回こういうふうに賞をいただいて、いずれ表現者になろうと思ってやってきたことが、いま、ノンフィクション作家といいますか、そういう道で開けてきたわけです。けれども、これから書くに当たって、どうしても気をつけておきたいことは、私は必ず体を使って書くということを基準に据えていきたいなと思っています。せっかくバックパッカーで、私は体力にもまあまあですけれども自信はあります。それに、体を鍛えることも大好きですので、できるだけ自分でその場に行って、肌で触れて、自分の耳で聞く。すると、話している相手が、自分はこ

う思うとか、意見とか、いろんな考えをいってくれるんですね。意外と本質というのがしゃべっている言葉の中にあるのではなくて、しゃべっている人の中にあつたりするということが、これまでにもあつたなと思うんですね。

その人としゃべっている状況の中に、すごく重要な答えがあつたり…。だから、そういうものは、平面的なとらえ方で物事をみていてもなかなかわからない。それは自分でちゃんと三次元の世界に身を置いて、自分の肌でしっかりと吸収して、それを消化して、もう一度言葉で吐き出していく。そういう作業がどうしても必要になると思います。ですので、無謀だとか、いろいろいわれたりもするんですけども、私は体を張ってやりたいなと思っています。

それから、私は、書くときに気をつけたいのが方法ですね。それは文体とか、いろいろものなんですかけども、できるだけ今までにない方法というのを考えたいと思います。旅物を書いているのだから、こういう方法でとか、ノンフィクションとはこうあるべきだと、これまでにも文法とかあったと思うんです。けれども、私は、できれば何か違う方法で書きたいというのがありました。今までの既成の方法を使い続ける以上は、読者層がある程度固定化されて、それ以上には広がってもいかないし、そこに変化を加えることもできないと思っていますので、私の、自分のアプローチしたい読者層にアプローチできる方法を常に探していくたいと思っています。

イスラムやアフリカの女性を書きたい

これから書いていきたいテーマは何かといわれると、いろんなものを書いていきたいのです。その1つということではないですが、今回旅をして、女性の社会というものに興味を持ちました。ノンフィクションの世界で、特に海外の話になると、フォーカスされているものが、現状では男性の社会なのではないかなと思います。例えば、政治を切り取ってきたとしても、大体、政治というのは男の社会で動いている。

経済も、男の社会であったりします。それと、中近東のイスラム社会を語るときに、女性のことって、実はあまりよくわからないんですね。男性社会が基準になっていますから。そういう部分が結構あります。

けれど、私自身が女ですし、旅をしていても、イスラム社会で、私がどこへ入っていくかというと、女の社会へ入っていくわけですね。バスに乗っても男と女が分かれていますので、私はどう考えても男のバスには乗らないわけで、女の専用車両に乗っていって、そこで出会う人々はみんな女性。その人たちにひつつい、「じゃ、おうちにいくわよ」といって招かれていくと、やっぱり女性の部屋で女性と一緒に過ごすことになる。すると、女性たちが意外とすごい内職をやっていて、経済活動が活発であったりとか、政治的な意見をすごく持っていたりします。そういう意外な側面もたくさん出てきて、現在、特にアフリカでも、ミクロの世界で経済を動かしているのは女性なんじゃないかなと思うような体験がありました。ですので、せっかく自分が女で、行き着く先も女社会が多いのだから、そのあたりをできればこれから書いていきたいなと思っております。

質疑応答

石郷岡建企画委員(司会・毎日新聞出身) それでは、ざっくりばらんな形で進めたいと思います。最初に口火を切ることということで、中井さん、お願いできますか。

中井良則日本記者クラブ事務局長 ふだん事務局はこういうときに質問などしないで、後ろのほうに控えているんですが、きょうは中村さんにぜひ来てほしいと思って声をかけたこともあります。質問させてもらいます。

読んだ印象が、非常に新しいというか、文体とか発想とか、物の見方が違うなあと思いました。いまの若い人はこうなったんだなという気がすごくして、それに感心したんですね。旅のノンフィクションで、我々の世代だと、小田実

の『何でも見てやろう』とか、沢木耕太郎の『深夜特急』なんですが、そういったものは読みましたか？ それとも全然関係ない世代ですか。

中村 『深夜特急』は読みました。

中井 多少、影響を受けていると思いますか、あまり関係ない？

中村 そうですね。やっぱり旅に出たいと思わせる本ですよね。非常にうまく書かれていて、旅に出たいと思わせる、モチベーションを高めるという意味ではすごくいい本だと思います。

ただ、いまの時代は、海外に出ていったから、何でもみておもしろいかというと、必ずしもそうではない。私たちの時代は、ほんとに情報社会です。インターネットだって普通にあって、世界中の情報が一瞬で手に入れられる。そんなある種の錯覚もありますけれども、そういう時代に生きているわけです。格安航空券もたくさんあって、いつでも海外に行ける。だから海外に行くこと自体が、全然珍しくもないですね。海外に行ったところで、その先で出会う人たち自身も世界中を飛び回っている人たちです。現地の人の生活に突然入っていけるとか、そういうのももうないような時代ですので、旅すること自体が全く特別ではないというところで、沢木さんとか、小田さんの時代とは違うんじゃないかなと思いますね。

中井 旅の最中に、ブログを書いていたということですが、この本は、そのブログに書いたことはもとになつてないですか。

中村 もとになっている部分もたくさんありますね。

中井 いろんなエピソードや、いろんな人に会ったときのことを書いているのですが、それは日記をつけていたんですか。

中村 ブログで、出来事は大体書いているのです。日本語版と英語版で違うトピックを扱ったりしながら書いていたので、この本を書くときに、最終的にブログをもう一度自分で読んでみました。すると、そのときの情景が浮かんでくるんですね。例えば、ブログの中では目の前にいたおじいちゃんのことを書いていたとしても、そのブログを読むと、私の隣にいたおばちゃんのことも思い出されてきたりして、それで空間全体が思い出されるんですね。

そのときに、医療改革フォーラムのために書くものであれば、そのおじいちゃんの健康状態について書いているかもしれないけれども、本に書くときには、実は私は、隣にいたおばちゃんに本当は興味があったのよ、と。そういう場合は、そのおばちゃんにフォーカスを置いて書きました。そういう形ですね。

中井 それじゃ、かなり記憶をよみがえらせながら書くという感じのところもありますか。

パキスタンで出会った青年のいい話

中村 そうですね。それは頑張って記憶をよみがえらせたというよりは、ちょっとしたきっかけです。ブログを読むという、一回スイッチが入ればもうすぐその状況が浮かんできますので、そのときに自分がみた光景などは全部戻ってきますね。

書き始めて意外だったのが、こんなにもすごいいい話を、世界の人はしていたんだなということです。自分でも驚くぐらい、実はいい話をしています。

この本の中で、パキスタンの青年が出てきます。北部の山の中で出会って、彼は、「君も僕も結婚すべきだ」というんですね。「君は日本に帰って結婚して3人子どもをつくれ。僕はこっちで結婚して5人子どもをつくる。10年たら再会しよう」というんですね。それで、自分たちの子どもを連れてきて、一緒に遊ばせようというんですね。彼は、自分の結婚は、イ

スラム社会ですから、いいなずけと結婚するわけです。けれども、そのことを、彼の置かれた状況でポジティブにとらえているんです。「僕は結婚式の当日に初めて妻に会って、それから10年かけて恋をして、それから10年かけて夫婦らしい生活をするんだ」みたいなことを語っているんです。ああ、そんな美しいことをいっていたなと思って、本を書いている途中に、こんなに美しい話をしていたのに、私はそのことを忘れて、日本で生きていこうとしていたのかなと思うと、やっぱりこの本を書くという作業をやってよかったなあと思いました。

中井 行く先々で、初めて会うお兄ちゃんとか、おじさんとか、おばちゃんなど仲良しになるでしょう。で、うちに来なさいよといわれて、ひょこひょこついていくでしょう。何でそんなすぐに仲良しになれたんですか。

コツはにこにこ“ソフトパワー”

中村 えーと、まずひとつ目は、世界の人たちは、みんな仲良しになりたいと思っていると思います。日本で世界のことをみていると、人間というのはネガティブなところを見過ぎるといいますか、世界に行ったら、こんな危ない人がいるとか、盗難に遭うとか、だまされるとか、そういうものは簡単に伝わってくる情報だと思います。けれども、世界を歩いてみると、みんなすごく親切にしたいんだなと思いましたね。逆に、向こうが、日本から来たよくわからないお姉ちゃんだけど、友達になっておきたいとか、ぜひうちの家族と一緒に何かをして、思い出にしたいとか。結構、そういうように思ってくれていたんじゃないかなと思います。

人と仲良くなるコツということも旅をする中で考えるんですね。自己防衛の手段は、一つには、武装すること、強くなること。例えば刃物を持って威嚇するとか、そういう方法もあると思います。けれども、それ以外に、ソフトパワーというのがありまして、自分の弱さをある意味出していく。仲良くなってしまうことで自

分の身を守るという方法が、十分にあり得ると、私はだんだん気づいてきたのです。逆にそっちのほうがすごく効果的だなと思いましたので、まあ、結構、私はへらへら笑ったりしますね(笑)。にやにやしたりもしますし。

特に言葉が通じないような国で、どれだけ私が相手に危害を加えようしていないかということを証明しようと思っても、なかなか言葉で表現できないわけですね。そうしたら、とりあえずにこにこして、向こうが抱き締めてきたら抱き締め返してあげればいいんじゃないか。そのぐらいに思いました。

いろんなコツはあるんです。けれども、一番最後のところで、危機感というのは絶対にどんな状況でも捨ててはいけない。それだけは持っていないといけないんです。けれども、できるだけ自分を開いた状態で相手を受け入れるという気持ちでいると、相手もわざわざ私に危害を加えたくて近づいてくるというケースは、ほとんどなかったかなと思いますね。

中井 イスラムの国に入していくのに、偽装結婚したというエピソードがありますね。

中村 偽装結婚といつても、別に本当に大したことではないんです。イランに行こうとしていたときに、イスラム教の戒律の厳しい国ですので、男性同伴でないと入れないということなんですね。ちょうどウズベキスタンにいたときにイラン大使館に行って、イランのビザを取ることになったんです。けれども、周りの情報で、日本大使館にも一応行っているんですけども、なかなか女性一人で行ってもビザはおりないぞと。一番いいのは、自分の夫と一緒に申請に行くことといわれたので、これは夫を探さなきやいかんと。ウズベキスタンで日本の観光客はそんなにたくさんいるわけではない。1人しかいなかつたんですね。大変まじめそうな日本のバックパッカーの方がいまして、その方に、「結婚したらどうかな」と、私のほうから声をかけさせていただきまして、一緒に大使館に行って、「夫婦です」といいました(笑)。それで、

ビザも無事におきました。大使館側も、気づいていたのかどうかは知りませんけれども、とりあえずビザはおりまして、一緒に国境を越えて、イランに入って、即離婚という(笑)、そういう形で……。

中井 その元夫とは、いま、連絡は途絶えているんですか。

中村 とっていないですね、実は。最後、一緒にイランの首都テヘランで宿に泊まっていたんですけども、私は、自分の行きたい方向があって、北のほうに行きたいと。彼はもっと早くトルコのほうに抜けたいということでした。このあたり、夫婦げんかは普通に勃発しまして、私は、早朝のバスに乗らなければいけなかつたので、彼は、隣のベッド——別々ですけど——に寝ていました、そのまま出てきました。彼は寝ていましたね。それで、Eメールを交換したりとか、電話番号を交換したということもなく、いま、彼がどこにいるかはわかりません(笑)。多分、東京にいらっしゃるのではないかと思います。

中井 僕ばかり質問してもあれですが、もう一つだけ。さっきもアメリカの若者は決してそんなに外国に行ったりしないという話があつて、日本のいまの若い人たちもあまり外国には関心を持たない。留学をする人も少ないという話も聞きます。あなたと同じ世代の日本人たちが、やはり外国に関心がないなと感じますか。あるいは、そんなことなしに、やっぱりみんな外国に行きたいと思っていると思いますか。

アグレッシブな女性たち

中村 そうですね。私がいま、ちょうど30歳なんですけれども、私の年代ぐらいですと、それなりに海外にも関心を持っている人もいるんじゃないかなと思います。けれども、もうちょっと下の世代、20代前半になってくると、

海外には関心がないのではないかなど思います。でも、はつきりしたことはわからないですね。

私がこういうふうに、すごく海外に行きたくて、ずっと行きたい行きたいと生きてきていますので、自分の周りに集まってくれる人も、結構海外に行きたい人ばかりです。私の周りに聞いていえば、みんな非常に国際的です。特に、女の子たちが国際的ですね。

中井 それは何ですかね。日本では狭苦しくて、生きていくのが大変だから外国へ行きたいとか、そういう感じですか。

中村 うーん、日本がいい悪いというよりは、外国に行って得られるもののアドバンテージとか、そういうものを結構意識しているんじゃないでしょうかね。早いうちに語学も習得していますし。それからコミュニケーションというのは、必ずしも語学を国内でやっただけではなかなか身につくものではない。海外の現場に行って、実際に人と話をしてみてやっと初めてわかるものですよね。能力というのはそういうところでやっと培われてくるものだと思いますので、そういう意識があるんじゃないかなと。みんな結構アグレッシブに、あっちこっち……。

私の周りのアグレッシブな女性陣は、そんなにきっちと緻密な計画を立てようという感じではなくて、とりあえず行って、とりあえず体験してみて、それで後から、それが何だったか考えて、足りないところを勉強するなり何かで補えばいいんじゃないかな。そういう感じですね。

中井 では、最後の質問にしますけれども、幸せって何ですか。

中村 私にとってですか？

中井 はい。

中村 幸せというのは、私は自分のやりたいことをやり抜くことですね。それはもう昔から変わってないです。いろいろ皆さん幸せの基準は違うと思います。けれども、私は基本的に貧乏とかも嫌で、お金はあったほうがすごくいいんですけども…。だけど、衣食住が多少厳しくなったとしても、自分がやりたいことをやっていることが一番の幸せですね。その点においては、海外にも留学することができましたし、非常に苦しいこともあったんですけども、基本的に、自分のやりたいこと以外は一切やらずに生きてきているので、非常に幸せな人生だと思っています。

中井 この2年間の旅行の行く先々で、そういう、あなたの基準でいう幸せな人って、たくさんいましたか。

幸せの基準なんて…みんなそれぞれ

中村 うーん、どうですかねえ。みんな、幸せの基準が違うんだろうなあとと思いましたね。だから、私の基準でいえば、やりたいことをやるということですけれども、必ずしもやりたいことをやれなくても、みんな家族がいて、仲よく暮らせれば非常に幸せという人ももちろんいます。そういう意味で、私が日本にいたときに、海外の人はもっと不幸なんじゃないかなと、特に私の行った先の国々、中東とか、アフリカとかの人たちというのは、もっと不幸じゃないかなと思っていたんですけども、意外とパワフルで、何か幸せそうに生きているなという印象は受けました。ちょっと抽象的になって申しわけないんですけども。

中井 どうもありがとうございました。

司会 それでは会場の方で、質問でも、コメントでも、とうぞ。

質問 何十カ国と回られるときに、まず、言

葉が問題になると思うんです。中村さんはアメリカの大学におられたので、もちろん英語はおできになると思いますが、アフリカとか中東とか、英語が通用しない国もたくさんある。そういう場合、言語の問題をどう解決されたんですか。通訳を雇うとか、町の中で、生の声を聞くにはちょっと邪魔なときもありますよね。どういうふうにして、その言語の問題を解決されましたか？

表情筋と万国共通のジェスチャーで

中村 言語の問題ですけれども、中東とかアフリカに関しては、英語が通用します。中国も、日本で思っているほど英語が通用しないわけではなくて、世界中ほとんど英語が通じます。というのがまず前提にあって、でも、それでもどうしても通じない国というのがいくつかエリア的にはあります。そこはどこかというと、旧ソ連の国々ですね。ウズベキスタンとか、トルクメニスタンとか、あのあたりは、第2言語がロシア語だったりするので、A B C もわからない。「イエス」「ノー」も通じない。そんな国に行ったときは、やっぱりその現地の言葉を学ばないといけないというので、最初に覚えるのが、大体「これ、いくらですか？」とかです。

そういうことだけは押さえて、あとは身振り手振りです。通訳は一切雇いません。バックパッカーですので、もうバスに乗るときも、買い物をするときも、行き当たりばったりで行って、現地語で「いくらなの？」というようなことで聞いたりして、あとは紙を使って、手を使って、表情を使って。だから、表情筋なんかものすごく鍛えられました。日本でいま、「表情筋を鍛えましょう」とかいう本も出ていますけれども、「とりあえず言葉の通じない国に行けば表情筋ぐらいは鍛えられますよ」といいたいですし、そういうものではないかなと思っています。

あと、ジェスチャーですね。ジェスチャーというのも、ずっと旅をしていると、意外とこれも鍛えられてきます。万国共通で通じるようなジェスチャーというのが大体わかってくるん

ですね。お金とか、一番伝えなきやいけないのは、例えばトイレ。これすごく重要なんです。けれども、最初のころは、ジェスチャーでトイレに行きたいというのをいかに表現すればいいのか。いろいろ悩みました。でも、いまではもう一発で行けるというのがわかつてきました。まあお金だったら、こんなことをしたりすると（指をこする）、「ああ、お金のことね」と、大体わかつてもらえます。そういうのは、実践で鍛えるものだと思います。

言葉に関しては、それほど不自由はしないということですね。日本の方が海外に行かれたりして、言葉の壁があるんじゃないか、コミュニケーションの問題が出るんじゃないかとよくいわれますけれども、コミュニケーションがとれなくなっている一番の原因は、焦りではないかなと思うんですね。言葉が通じないから焦る。伝わらないかもしれないから焦る。それから、そういう焦りの状態にいるときというのは、相手が何をいおうとしているのかが受け入れられない状態になっていると思います。

私も苦い経験がたくさんあっていまに至っているんですけども、もともと、なかなか通じないものだと思って、とりあえずじっくり構えてみる。自分が何かを伝えなければいけないというよりは、相手が何かを伝えようとしていることに、じっくりと耳を傾けて、相手の動きをじっと観察する。そういうふうにしていると、意外と向こうが何をしようとしているのかもわかりますし、それからまたこちらが伝えたいことも伝わっていくなという印象があります。

質問 とっても懐かしいし、うらやましいと思いました。私も、半世紀前でもないんですけども、何十年も前に、やっぱり一人旅をやったことがあります。けれども、いまの時代だからかなあということと、中村さんのキャラクターに、もう、うなずきながらご本を読ませていただきました。

中村 ありがとうございます。

質問 それで、結婚・離婚のことはとても感心したんです。けれども、1回きりじゃない。2回も、再婚もされていますよね。

中村 そうですね、はい。実は。

質問 それで、2回目もきれいに別れられていますね。私もトルコに何十年も前に行きたかったんですけども、とても脅かされて、結局、やめちゃったんですよね。あ、そういう手もあったんだと…。そういうその場その場の臨機応変ぶりというのに、とても感心したんです。さつき、弱みを見せることで敵の懐にまず入ってしまう。どうせ刀持つて戦ったって負けるんですから、とても知恵だなあと思いました。そういう生き生きした経験というのはとってもすばらしいなと思ったんですね。

中村 ありがとうございます。

質問 それで、ファンが周りにいらっしゃるようですけれども、私、女子大で教えておりまして、あまり元気がない女の子たちをみているんですね。あなたのように元気な人たち、やればできるということを、ご本人の口から、こんないいことあったのよ、やつたらこれだけ得したのよ、どうだ！ みたいな事例ももしあれば教えてもらえるとうれしいというのが一点。

それから、ほんとは舞台芸術のルポをなさりたかったはずが、現地でいろんな出会いがあつて、途中から目的を広げたというか、変わったとおっしゃいました。肝心の舞台芸術のほうでは、これから何かなさろうとされているのか。目的はございますでしょうか。

中村 かしこまりました。では、舞台芸術のほうからお話しします。

舞台芸術の方面では、いまのところ、何も予定はありません。そもそも本を書くときも、最終的にシナリオを書きたいという思いもありますし、その最初の段階としてこういうものを

書いているというのもあるんです。けれども、舞台芸術となると、それなりに組織とか基盤とか、そういうものが必要になってくるんですね。私、性格的に、結構1人でぶらぶらあっちこっちに行って、あまり組織に属さないような性格というのもあります。ですので、そのあたりがこれからどうなってくるかは、まだわかりません。

それから、海外へ行って得をする……。うーん、難しいですね。海外へ行って、まず物の見方がすごく変わってきて、ちょっとやそとのことでは動じなくなってしまいます。そういう意味で、それまでは、自分の目の前にあって非常に不幸だなとかネガティブにとらえていたようなことが、別に本当に大したことではないというか、そういうふうに思えるようになる。そういうのはあると思うんですね。

悪いこともラッキー！

海外で旅行していて、自分の身に起きることって、半分半分で好ましくないことが起きるんですね。自分の思いどおりにいかないことがたくさんある。だけど、これは一つの法則みたいなことで、思いどおりにいかないことが起きてがっかりすると、必ず次、いいことが起きるんですよね。もしかしたら自分でこじつけているだけかもしれないんですけども、経験的に、そう思います。特に旅の後半、1年たった後ぐらいから、何か悪いことが起きると「ラッキー」と思うようになってきました。私の場合はですね。

例えば、バスに乗ろうとして、わざわざバス停に行ったのに、そのバスがきょうは出ない、あしたにならないと出ないとか、そういうのって、一回一回がっかりするんですね。だけれど、そのうち「そのバスが出なかったことで何かいいことが起きる」と、その瞬間に思うようになるんですね。

だから、例えば自分の体がちょっと弱ってきて、風邪を引いたり下痢になったりするのも好ましくないことなんですかけども、自分が弱っ

ていることで、逆にすごく人の温かさに触れたりとか、助けてくれる人に出会えたりとかするんですね。その人がいまもずっと長いおつき合いで一生の友達になったとか。何がどう好転していくかって本当にわからなくて、そういうことが身をもって実感できるといいますか……。

だから、それまで自分がみていた世界は、自分で勝手に不幸だと決めつけてた部分があつたなと思います。

ですから、日本国内にいて自分自身の幸福感を高めようとしても、なかなか難しいかもしれません。海外に出て戻ってきて、もう一度同じ状況に戻ったときに、自分の中の幸福感というか、物の見方がもっともっとポジティブになるのではないか。そういうふうに思います。ちょっと具体性のない話で申しわけないですけれども。

女子大ということですけれども、世界にはすてきな男性方がたくさんいらっしゃいますので、そういう方に会えるチャンスもふえますよ。きょうはこの会場も女性の方が1人だけですね。あえて申しあげますと、すてきな方に会えるチャンスが、日本の人口の60倍ぐらい世界の人口はおりますので、60倍の男性と一緒にでも、女が半分いるから30倍ということです——会えるということだけではなくて、それ以外の職業的な可能性もあります。住む場所だって別に日本国内だけにこだわる必要はなくて、それ以外にもすばらしいところが世界にはたくさんある。そういうところで楽しい生活を送ることもできるし、いろんな意味で、どんどん可能性は広がっていくと思います。

司会 ということだそうですけれども、次の質問は……。男性ばっかりと文句いわれちゃいましたけれども。

中村 いえいえ、文句ではなくて……。

質問 テレビ局の出身です。主観を排してお

書きになったとおっしゃっていましたね。僕が思い出すのは、パリの支局長をやっていたときに、一緒に働いていた若い、ちょうどいまの中村さんぐらいの年の、非常に優秀な女性の特派員が「ニュースの職人になりたい」といっていたんですよ。何か共通の感じがして……。なぜ、主観というか、自分を出すことを控えて書きたいと思われたのか。

僕にとっては、「ニュースの職人になりたい」という言葉は非常にショックだったんです。ジャーナリストというものはそういうものじゃないと思っていたので。ジャーナリズムというのは、一つの世界の哲学を持ってみるべきである。批判的な目でみるべきである。職人ではない。そう思っていたので、その言葉というのはその後、すごく考えさせられているんですね。

もう一つは、「カウンターホームシック」のことです。それはどういうことなのか。僕自身はいま半年ずつヨーロッパと日本で暮らしていましたが、日本にいると、ちょっとうつっぽくなるんですよね。それは単純に日本のほうが笑顔が少ないと、親切な人に会う率が少ないということだと思うんですけども、そういう要素があるのか。不幸だと思っていた国で、はるかに親切な人に会ったというか、人間らしさの中に生きたので、日本に戻って、落差で落ち込んだのか、もっと別のことなのか。

NGOの若い女性と話していると、生き生きしているんですよね。もう、これ、中毒で帰れないって。助けに行こうと思って難民キャンプなどに行って、むしろ何が幸せか教えられたというようなことをよく聞くのです。そういうことなのか。いまの日本をどうみていらっしゃるかということも含めていかがでしょうか。

旅先の出来事は日本に深くつながっている

中村 カウンターホームシックのことですけれども、私は日本をそれほど悲観的にはみていません。海外から日本に帰ったときにいつも、ああ、日本に帰ってこれてよかったですと思ってしまいます。自分の帰ってくる国が日本だから、逆に海

外に行けるという部分もあって、私は日本に帰ってきて、笑顔が少ない国だとも実は思っていません。日本人は非常にきめ細かいことができますし、サービスもすごくいいですし、結構みんな、仕事でかもしれないですけれども、ニコニコしていて。それに比べて世界の人は結構ぶっきらぼうだったり、恐い人もたくさんあります。ですので、そういう意味で、私は日本に帰ってくるとほっとしますし、私は日本を、どっちかというと好きです。

ですので、カウンターホームシックというのはそういう意味ではないのです。今回、カウンターホームシックにかかってしまった理由は、自分自身が旅行の経験を切り離そうとしたということが一番の原因だったと思うんですね。

私は、旅に行く前から、これが最初で最後の旅になるといっていたんです。私はいつまでもだらだらバックパッカーをやるつもりもないし、これは自分への投資なんだから、2年間バシッとやって、帰ってきたら社会復帰をして、それで表現活動をやりながらちゃんとやるんだ、みたいなところがあったんです。もう旅はしないといい切っていたんですね。けれども、やっぱりそういうものではなくて、旅先でみたものというものはすべて深いどこかで、日本の社会とすごくつながっているんですね。

世界で、もし問題があったり、深くどこかで病んでいる部分があったら、それは本当に日本国内の問題でもあったりしているわけです。そういうものが潜在的には自分でわかつていたんだと思うんですけども、でも、やっぱり海外と日本は違う。日本に帰ってきたら、毎日まじめに働く。そういう社会に戻らなければいけないというのがあって、何か自分で思っていたほど簡単に経験をうまく切り離せなかつたというのが一番の原因でした。それで、海外で出会った人たちの、非常に魅力的な言葉を持った人たちの存在と、その経験ともう一度向き合わなければいけなかつたんだと思います。それを向き合わずに、日本に帰ってきてから、じゃ、日本の社会で生きていこう、と。それはちょっと虫のいいことで、そういうことができなかつた。それが自分の心の中でわかつていたので、

だんだん暗くなつていったんだと思つています。

下痢だイエーイ！ 鼻血がタラリーン

それから、カウンターホームシックで、もう一点あるのは、国外にいるときというのは、ある意味、ちょっとハイの状態なんですね。苦しいこととか痛かったこととか、そういうことも絶対起こつたはずなんです。けれども、そういうことといちいちかかわつてると旅をやり切れないというところがあります。何が起きても前向き、何が起きても楽しい。いま、ブログを振り返つてみたとしても、すごく明るいんです。「きょうも毎日下痢だ～」とか、下痢が楽しいわけないのに、「イエーイ！」みたいなところがありました。

西アフリカのときのブログなんかをみると、ほんとにそうですね。そのころサハラ砂漠にいて、疲労もあって、毎日鼻血が出ているんですね。朝起きるとずうっと鼻血が出て、鼻にティッシュを詰めて生活をしている。それ、普通じゃないんですよね。けれども、ブログには、「きょうも鏡の前に立つたら、鼻血がタラリーン」とか書いて、すごく楽しそうなんですよ、やたらと。でも、毎日鼻血が出るなんて普通のことではなくて、絶対に自分は弱っていたと思うんですけども、そんなことを考えていたら乗り切つていけない。ですので、「タラリーン」とかいいながらやつていて……。

日本に帰ってきて、社会にさっさと復帰しようとした理由のひとつとして、そういうネガティブな世界、本当は苦しかったけどという世界と自分が向き合いたくなかったというのもすごくあるんですね。で、帰ってきた途端に、旅を振り返つて、本当はすごく孤独な思いもしたし、苦しいこともあつたし、体も結構悲鳴をあげたりしていたことが、そういう2年分が一気に自分の中に沸き起つてきて、降りかかつてくる。2年分が一気にくるわけですから、体もそれまではすごいハイテンションで乗り切つていたものが、帰ってきてファット力を抜いた

ら、もう2年分の疲れがドカンときて、もう起きてもこれない。そういう状態で、体重も落ちていきましたし、体も苦しくて、そういう2年分の苦しかったことが降りかかってきて、カウンターホームシックになったなというのがあります。

自分の善悪を押しつけたくない

それから、主観を除いて書くということなんですけれども、「ニュースの職人になりたい」といわれた方の気持ちというのは、私はすごくわかります。私はこの本を書くに当たっても、職人的な気持ちで書きたいと思っていました。ただバックパッカー旅行をして、その体験記をまとめましたというものではなくて、そこから一回離れて、事実というものを客観的に人に伝えるという作業をしたかった。絶対に自分の思い出話とかになってはいけない、それではちゃんととした表現というものにはならないと思ったので、それを一回切り離して、外から見直さなければいけない点もありました。

あともう一つは、先ほどおっしゃったように、必ず自分の正義をもって行動していくということですね。私は旅をして、いつもいろんな記念館にも行くんです。戦争の後の記念館とか、東南アジアでも、たくさんそういうところにも足を運びました。それで、いつも思うのが、20世紀やその前というのは、どこの場所にも非常にイデオロギーが一本きっちりあって、そこをみんなが追いかけて、それに対抗して、よいか悪いか、白黒はっきり分かれてやってきた時代だったと思うんです。けれども、いまはそういう時代ではない。昔ははっきり善悪があったことが、いまはもう一度フラットな状態で考え直さなければいけないようなことがたくさん出てきている。それぞれ個人が思考しなければいけない、そういう時代だと思っているんですね。

それをやっていくに当たって、自分の主観で、これは善だ、悪だと判断をして、何かを提示していくことが正しいのかどうかというときに、私は自分自身の中で、個人的に思う善悪の判断

なんかは常にきょう思っていたことが、あしたになつたらほかの情報を得ることでまた変わっていくかもしれない。そういう状態にあるんですね。だから、自分の主観というのを人に押しつけることはできないなと思っています。私の主観というのが間違っていることもたくさんありますので、それは読む側の人が自分で考えればいい。何が善悪なのか、どうすればいいのか、そういうものをそれぞれが思考して、そして、そのことに対してきっちり自分で責任をとっていく。だれかがいったから、こういうふうについていく。こう悪くなっちゃったから、だれかのせいだと、そういう時代ではないのではないか、というのが主観を排して書きたいという理由の一つにあります。

質問 隨分前ですけれども、堤未果さんに、『貧困大国アメリカ』を書いた直後にインタビューしたことがあります。あの本も、アメリカの中で随分危険なところへ行っているんですね。例えば、ブッシュ時代に、相当に監視の目があるときに徴兵拒否みたいにしていた学生に会ったり、いろんなヤバいところにも行っているんです。それで軍需産業にもつけねらわれたりしているんですが、どうしてそういう危ないところへ行って、危なくなかったのかということをお聞きしたんですね。どういうふうにして身を守ったのかということを聞いたら、「たくさん友達がいて、そういう友達たちが、結構メールで、そういう危ない取材のときに守ってくれた」ということをいっているんです。お一人で旅をなさっていて、先ほどからニコニコして乗り切ったというふうにおっしゃっているんですけども、ちょっとそれ、ヤバいんじゃないかなと思って聞いていたんですね。

もう少し何かあったのかな、どうなのかなということをお聞きしたかったのがひとつ。もう一つ、読んでいないのではっきりわからないんですけれども、ブータンに行かれていますか？

中村 ブータンは行ってないです。

質問 この前、ブータンの首相がここで記者を見したんですが、GNH（Gross National Happiness）という、いい話をしていたので、感想をお聞きしようと思ったんですが、それは後にします。

ネット情報やガイドブックには頼らない

中村 ブータンはお金がかかるんですね。でも、あの国は入ろうと思います。行ってみたいと思います。

安全対策に関して、ニコニコしていたのはそうなんですけれども、もちろんそれだけではない。本の中でも書いているんですが、私は行く国の、外務省が出している「海外安全ホームページ」はチェックします。ネットカフェに行って、その内容をUSBに落として、自分のパソコンにためて、きっとそれは一応読んで行くんです。でも、はつきりいって、その情報が自分の身を守るためにすごく有効だと思っていないんですね。一応みますけれども。

それで、退避勧告とかが出ている国には、行って何か問題が起きると、非常にたたかれますので行きませんけれども——1カ所行っているかな、それぐらいで——情報を探すときに、私はあまりインターネットに頼らずに、堤さんと同じように現地にいる友達ですね、そういうものに頼りますね。

というのは、情報というのは、物理的に近いところでないと、やっぱりわからない。そういうものがたくさんあります。例えばガイドブックをみてもわからないし、日本でネットでチェックしてもわからない情報というのがたくさんありますので、私は旅が進むにつれて、行く先々で人をつかまえて、「私はいまからこの町に行きたいと思っているんだけど、あなたはどう思う」とか、その町から来た人をつかまえて、「あなた、いま行ってきたみたいだけど、どうだった？」と旅人をつかまえて話を聞くというのももちろんあります。それから、やっぱり現地の人ですよね。どれだけ周りの旅人とかジャーナリストが知っているといつても、やっぱり

現地の人にはかないません。現地の人が「あそこにはあの部族がいるから、危ないから行くな」といったら、そういうところには絶対に行きません。

ですから、コミュニケーションですね。現地の人とのコミュニケーションの中で、有効な情報を得て、それを活用していく、それ一点に尽きると思います。

司会 私から質問をしたいんですけども、この本の名前は、『インパラの朝』となっています。このタイトルについてうかがいたいのです。前のタイトルと違いますよね。多分、出版社からいわれたと思うんですけども、中さんはどういう感じを持っていらっしゃるんでしょう。

草原にすくっと立つインパラの目

中村 この『インパラの朝』というタイトルは、実は私が最初につけたタイトルなんです。これは『インパラの朝』というタイトルをつけて書き始めた本なのです。タイトルが最初にあったんです。けれども、出版社の意向で変えてくれということになりました。編集部の中では、この『インパラの朝』というタイトルが酷評されまして変更した。でもとりあえず賞を取って、その後で堂々ともとに戻していただいた、という形で『インパラの朝』という題名になりました。

というのは、この本を、さっきの方法論ではないですけれども、いわゆる旅物にせずに、どうまとめるかと考えたときに、私はインパラが出てくる朝の光景が思い浮かんできたんです。インパラがどこにも属さずに、普遍的な感じで草原にただ立っていた。インパラは、どこもみていないようで、全部をみているような目をしていたんですね。そのときのことをするごく印象的に覚えていまして、その普遍性といいますか、そういうものを一つ軸に据えてやりたいなと思ったんですね。私としてはこの本を書くに当たって、あまり偏りのないものにしたかった。

だから、これが善だと悪だと、はつきりと提示もしませんし、できるだけ偏らずに、普遍的なところに立って、一つ一つの事例を検証していく、それで受け取る人が受け取るべきものを受け取るというふうにしたかったのです。ですので、これは最初にタイトルありきで書いた本です。

司会 私はアフリカの特派員をしていたので、このタイトルをみた瞬間にボーッと浮き上がるイメージがあるわけですね。そのイメージから読むと、違う部分もかなりあったんですね。

それはどういうことかというと、私が読んでいて思ったのは、アジアにいるときとアフリカにいるときでは感想が違ったことと、中村さん自身も変わったのではないかという気がしたんです。簡単にいうと、動のアジアに静のアフリカみたいな感じになっていると思ったわけです。そういう変化とか、アジアとアフリカは違っていたということはあったんでしょうか。

中村 アジアとアフリカが違っていたのではなくて、私自身が変わっていったということだと思います。

最初のころは、物事に対する対応の仕方が下手くそで、物事との距離の取り方が非常に下手だったなと思うんですね。それは余裕がなかつたという一言に尽くるんですね。例えばミャンマーで、すごい手厚いもてなしを受けて、それを全部受け入れようとして、自分の心がパンクしてしまうんです。けれども、そのときに、それを全部受け入れなくてはいけなかつたのかというと、別にそうではないんですね。もしそれが、例えば私が1年以上旅をした状態でのシチュエーションに当たっていたら、もっと全然違う形で距離をとって、もっとうまくおつき合いをして、もっと心の中にうまく整理できたんじゃないかな、というようなことがたくさんあります。

そういう意味で、最初のころは、危なそうだとか、危険じゃないかなと思って、必要以上

に警戒心を持ってしまったりとか、海外において体験されることは多いと思いますけれども、現地の人に受け入れてほしいからといって、すごくフレンドリーになり過ぎるといいますか、何かそういうところもあって、物事との距離のとり方が非常に悪かったです。

それが旅なれると、もう毎日毎日が修行です。毎日とんでもないいろんなことが起きて、いろんな人に出会って、それに対処しているうちに、自分と物事との距離感が大体固まつてくるんですね。相手にもつき過ぎないし、離れ過ぎないし、必要以上のことをしなくて、力も抜けてくる。それで、インパラみたいになってくるんです。何というか、目の前の小さなことにガッどこだわるのではなくて、いまはこのお兄さん、ちょっと怪しいことをいっているけれども、じっくり考えてみてみようとか。そういう心の余裕みたいなものがだんだん出てきて……。

それで、最終的にインパラに出会うシーンなんですね。ここ、私は実はすごい病気なんです。この平原でインパラに会う前は、エチオピアからトラックに乗って55時間かかってたどり着いているんです。その途中で40℃を超えるような熱も出て、水もない、何もないという状況で放り出されるんです。一番体力的に弱った状態で、インパラに会った。そのときというのは、自分にも何かをやろうという気力とか体力とかがほぼゼロに近い状態で、そこでスクッとインパラが出てくるんです。私の中で一番力が抜けていた状態のときに。だけど、自分に力がなくて、力が抜けている状態というのは、ある意味、物事を非常にすんなりと受け入れられる状態だったと思っていて……。

このとき以外のエピソードは全部人間が出てきているんですけども、このケニアのところだけ動物が出てくるんですね。

司会 そうですね。読んでいらっしゃらない方やインパラが何だかわからない方がいらっしゃると思うんですけども、インパラは、カモシカみたいな感じの動物です。アフリカのサ

バンナではそれが群れを成しているのですけれども、一番弱小動物ですから、肉食の対象になる動物です。だから、非常に弱い。それでもけなげに朝、立っているというのは、大体アフリカへ行った人は強烈な印象を持つわけでありまして、その話であります。

もう一つ、インパラの朝にかかることが最後にもう一回出てくるんですね。それはサハラ砂漠の中でトワレグの人たちをみながら砂漠をみていると、やっぱりインパラの朝を思い出すという人が出てくるんですよね。そうですよね。

中村 そうです。

司会 私はここでも、アジアだったら人なんだろうけど、アフリカの場合には人ではなかつたなという感じがするんです。それはある種、人を超えるような哲学的な世界観に入っていたんじゃないのかなと。大体アフリカへ行くとそういうところへ入っていくんですけども、そうではないかなと。

そして、トワレグが出てくるサハラ砂漠をみると、みんな強烈な印象を持つわけでありまして、私は、この2つについて、やっぱりアフリカだな、懐かしいなと思った次第なんですけれども、いかがでしょうか。

中村 それがアフリカだったからかどうかというと…私は、ただ自分が長く旅をして、最後のほうにアフリカに行ったんですね。一番力が抜けた状態で物事をみていたので、逆にそういうインパラの姿とか、サハラ砂漠で祈りを捧げるトワレグの光景が、すんなりと自分の中に入ってきたのではないかなと思っているんですけども……。

司会 ちなみに、この本の旧名というのは、『バックストリートの星たち—ヨーラシア・アフリカ大陸、そこに暮らす人々をめぐる旅—』というんですけども、絶対『インパラの朝』

のほうがいいですよね。

中村 でしょう？ 私もそう思って最初につけたんですよ。どうやって書こうかなって、すごいカウンターホームシックで苦しんで、でもどうにか書かなければいけない。どうしよう、どうしようと思っていて、それでのインパラのシーン、あの象徴的なシーンを中心に据えて書こうと思って、『インパラの朝』という、すごく響きのいいタイトルがボーンと浮かんだんですね。で、よーしと思って書いたのに、「タイトル、ひど過ぎる」とかいわれて変わっちゃったのが自分としては残念でした。でも、まあ、そのときはそんなに『インパラの朝』が悪い、悪いといわれると、やっぱり相当悪いタイトルなのかなと、私もそう思い始めて、それで仕方なく改題しました。

でも、今度は『バックストリートの星』で出したら、選考委員の先生方にも、「これもひどいタイトルだ」とすごいわれまして…。それでまた次のタイトルに変えなきゃいけないということになりました。でも、最終的に『インパラの朝』で出版できて、本人としては非常にほっとしました。

司会 最初、アメリカに行っているわけですね。そして、今度は西へ行くという決意をしたわけですけれども、アメリカで体験したことと、西へ行ってみたものと、何らかの違った思いはあったんでしょうか。

出会う人の幅が違う

中村 アメリカと西の違いは、もちろん文化的にも違いますし、国それぞれがもう全く違うものだと思うんです。けれども、私が体験するものというのが、根本的にアメリカにいたときと西にいたときでは違っています。アメリカにいたときは私は学生という身分でした。留学生という身分がある程度保障されていて、出会う人といったら学校の先生とか学生さんとか、そ

のレベルなんですよね。

もちろん、アメリカは日本に比べたら人種も多様ですし、そういう意味で私は非常におもしろいなと思ってエキサイトしました。でも、同じような年代の、同じような学力を持った、同じようなまあまあの普通の家庭の子が集まって話をしている。そういう出会いしかないわけですよね。それが西へ行けば、バックパッカーですから、たまにはビジネスなんかで大成功しているすごいおじさんとかに、突然飛行機で隣り合わせて出会っちゃったとかもありますし、大学の先生に出会うこともあります。ホームレスをしている人たちとすごく仲良くなっちゃったとか、そういうこともあります。出会う人の幅が、私が東にいたときと西に旅したときでは全然違っていました。

それで、西と東の違いは、それは国が変われば、全然違うと思います。

司会 個人的なことで申しわけないんですけども、私も30年ぐらい前、こういう一人旅をしたことがあるんです。けれども、中村さんの本を読んで、決定的に違うなと思ったのは、30年前は、バックパッカーをしているのは西洋人と日本人だけだったんですね。ところが今度、読むと、韓国人が2回ぐらい出てくるんですね。それは30年前にはなかったことですね。世界がヨーロッパ支配から変わっているんだなということを、この本を読んでつくづく感じましたけれども、いかがでしょう。

女性バックパッカーは日本人か韓国人？

中村 そのあたりというのは私の中でも強調していきたい部分もあります。昔はもちろんヨーロッパと日本だけだったんですけども、いま旅をされている韓国人が非常に多いんですよ。特に女一人でバックパッカーをやるのは、大体日本人と韓国人だといわれているぐらいです。アフリカなんかでも女一人でバックパッカーをしている人って、ほとんど出会わないんですけども、唯一出会ったのが韓国人の女

性です。バックパッカーをしていました、そういうのはどんどんアジアの中で広がってきていますね。例えば東南アジアのラオスを旅していると、マレーシアとかタイの学生たちがバックパッckerをやっているんですね。へえ、と思いまして……。

それから、私の友人たちとバックパッキングをやるんですけども、去年ネパールへまた行きました。そのときは中国人の友達2人と私の3人でした。ということは、中国の中でも若い人たちがバックパッckerとしてやってきている、そういう時代です。アフリカ人もいっぱいいますよ、バックパッcker。

司会 そうすると、16億人の中国人の社会からバックパッckerが出てくると、世の中が中国人であふれますね。

中村 まあ、バックパッckerだけじゃなくて、世の中、もう中国人だらけだと思います。アフリカも、もう行けばどこでも中国人ばっかりだと思いますけれども。

司会 では、ちょうど1時間半たちましたので、これで終わりたいと思います。長いことつき合っていただいてお話を聞いていただいた中村さんに、もう一度拍手をしていただければと思います。

中村さん、どうも長いことありがとうございました。

(文責・編集部)